

総合的な学習と情報コミュニケーションの相互作用に関する実践研究

「POTATO ROAD 2000」アジアの食文化を題材にしたメディア融合の交流学習
山形県山辺町立鳥海小学校（教諭東海林新司）、新潟県長岡市立表町小学校（教諭篠田賢一）、新潟県加茂南小学校
ジャカルタ日本人学校、中国大同市希望学校、他協力校日本国内4校
<http://toki.ed.niigata-u.ac.jp/~tokairin/potato/index.htm>
キ - ワ - ド 地域学習, 情報教育, 国際理解教育, 遠隔地交流共同学習
マルチメディア利用, 総合的な学習の時間

1. はじめに

(1) 企画の目的

- (a) 日本国内の複数学校や海外日本人学校などと協力して食文化を主軸に据えて学ばせる。
- (b) 各校で課題解決学習を行い、積極的に地域の人材「地域の先生」を学校に招き、児童の追究について専門的分野の指導をしていただく。
- (c) 地域の人々との交流から、自分たちの地域の文化について学習し、それらの結果を電子掲示板や電子メールなどで情報交換を行いながら、他校と交流を深めさせる。
- (d) AV機器やインタ-ネット、公衆回線などを利用しながら、児童の積極的な情報メディアの活用や他の学校との情報の交換を行わせる。
- (e) 自分たちの地域と他地域に目を向けさせながら、国際理解の素地を育てていく。



(2) 企画の内容

山辺町立鳥海小学校では、これまでナイロビ日本人学校との間で「そばウガリプロジェクト」(平成9・10年度、長岡市立表町小学校他複数校と「コ-ンプロジェクト」(平成11年度)と称する活動をおこなってきた。これらの活動は、総合的な学習の時間を視野に入れた遠隔地共同交流学習である。児童の意欲を喚起し、児童の問題意識を高めながら課題を解決していくことができるように教師は様々の配慮を行いながら児童の活動を見守ってきた。本企画は地域の人材を積極的に活用し、地域に根ざした活動をめざしてきた。その結果、地域と学校の相互にわたった児童の活動を行うことができた。地域に学び、自分たちの活動を地域に反映できるような力を児童は身につけてきている。また、インタ-ネットをはじめ数々の情報手段を用いて交流学校と共同で学習を深めた。遠隔地の学校との距離を縮めることはできないが、児童同士が遠く離れた異なる学校の児童を思い、その活動状況から自分たちの活動を振り返ることもできた。

(3) 企画の特徴

本企画の素材のひとつは身近にあるイモである。イモの種類や成長の様子、害虫などを調べてみたいという児童の希望から始まった。その学習過程の中で、地域の人々に栽培の方法をたずねたりしながら活動を続けた。実際にイモを植える体験活動を行いながら、他校と地域学習について情報を交換してきた。また、イモの種類やル-ツ、料理などを調べていく中で、海外の様子にも追究が及び学習を深めることができた。

2. 実践内容

(1) 実践の各段階と内容

(a) 計画決定の段階

- 1 電子掲示板やメ-リングリストで参加校を教師側で募った。(4月~)
昨年度から運用している「コ-ンプロジェクト掲示板」を使い参加校を募った。4月の段階で長岡市立表町小学校、加茂市立加茂南小学校が参加することになった。また、6月にジャカルタ日本人学校が参加を表明し、7月に大同市希望学校からも参加の約束を得た。
- 2 各校で活動の目的を明確にした。
参加校の各教師間の話し合いで各校の活動の目的を決定し、活動計画を作成した。各校とも4月に目的を話し合いながら、5月から児童は「地域」をテ-マに活動を行った。

(b) 活動を呼びかける段階

- 3 児童の手で活動を呼びかけた。(4月~5月)
鳥海小児童から各学校に電子メール、FAX、郵便などの複数手段で活動を呼びかけた。手始めにイモを各学校に送り、参加校・協力校で栽培した。ジャカルタには穀類の種を送り栽培を始めた。栽培活動や観察はジャカルタ以外は9月まで行われた。
- 4 具体的な活動を児童が決め、作物を栽培したり、地域を調べたりする活動を行った。(5月~12月)
鳥海小ではイモを中心に地域の人から栽培方法を聞き調べ学習をした。表町小では長岡のいいところ探して地元の人にアンケートを実施しながら学習を進めた。加茂南小では加茂の紹介したい場所やものを児童がまとめた。ジャカルタ日本人学校ではそばとパイナップルを栽培して観察を続けた。
- 5 食物などの栽培を通じた地域学習の中間報告を行った。(9月)
各学校で地域学習の中間まとめを行い、他校に発表できるように資料を用意してまとめた。

(c) 他校と比較しながら自分たちの活動に生かす段階

- 6 掲示板や電子メールで情報を交換した。(5月~)

E スクエア・プロジェクト成果発表会

鳥海小が送った芋の由来や栽培方法について各学校から質問などが送られており、鳥海小から返信を送った。12月現在で行き交ったメ-ル数は300通以上におよんでいる。また、テレビ会議システムを使い、鳥海小と表町小、加茂南小、ジャカルタ日本人学校、北条小とのオンラインの学習会を数回行った。

(d) 交流をさらに深める段階

7 中間報告として各学校の様子をDVDにまとめ各校での活動との比較を行った。(9月~)

9月に鳥海小、表町小、加茂南小、ジャカルタ日本人学校の4校の活動紹介のDVDをつかった。これを各校に送り、10月にさらなる交流を図った。

8 収穫物などを送り合い、試食を行う。(10月~12月)

鳥海小では、芋をつかった料理などを調べたり、地域の方や外国の方を招待した会食会を行った。またそのレシピを各学校に配布し、各校から返事をもらいながら情報を交換していた。同時に11月に地区の文化祭で、イモについての研究を発表したり試食コ-ナ-を出店したりした。

9 学校間・児童間の交流を深める。(6月~現在も進行中)

各校でおこなっている活動をテレビ会議などで紹介しあい、資料をお互いに送付したりしながら交流を深めている。その過程でメディアの特性や利用の仕方の違いなどにふれながら実践を深めている。現在もメ-ルなどで各学校間の交流を続けている。

(e) 共同で作品などにまとめる段階

10 児童の資料などを集約して共同の作品をつくる。(12月~現在も進行中)

各学校から寄せられた資料をもとにCD-ROMなどにまとめ、参加校・協力校に配布する。また2月にはお互いの成果で作成したDVD、CD-ROMなどをもとにして交流のしめくくりのテレビ会議を行う予定である。

(2) 地域人材の活用

各学校とも地域の人材を活用しながら活動を深めた。鳥海小学校ではイモの栽培方法を指導してもらったり、地域に住むベトナム出身の方からベトナム料理づくりを教えてもらいながら実際に一緒に作って試食した。

表町小学校では地区に住む花火師から花火の製造過程を教えてもらったり、1400人の市民へアンケート調査をおこなったりした。



イモ栽培の指導
<鳥海小>

東海林の授業
<希望学校>

(3) 学校間交流

国内の各学校間は手紙、電話、FAX、電子メ-ル、テレビ会議、ビデオレター、CD-ROM、DVDなど種々の手段で交流を深めた。

テレビ会議などではあらかじめ必要な物を事前に送っておき、可能な限り臨場感を出す工夫をした。ジャカルタ日本人学校とはDVDや電子メ-ル、NetMeetingで交流を深めた。テレビ会議ではそばの葉の虫の食べた穴について質問を受けるなど互いの観察した体験をもとに交流できた。中国希望学校とは郵便と電子メ-ルで質問をしたり答えたりしながら学習を深めた。教師が直接中国に赴き現地の児童と交流会を開き、DVDで活動を説明したり、日本の児童の様子などを紹介した。



パイナップル栽培<ジャカルタ>

3. まとめ

(1) 成果

- (a)積極的に地域に入り、地域から情報を得て年間を通して主体的に活動を行うことができた。
- (b)助け合いや、協力という集団型の学習から自分自身の学習課題を追究していきたいという意欲が見られた。
- (c)インドネシアや中国、ベトナムなどのイモをはじめとするいくつかの作物の様子や料理、また学校の様子などがわかり、視野が広がり、こららの学校と交流する中で友情や友好を深めることができた。

(2) 課題

- (a)自分の学びの成果を自分で確認できる情報整理能力を育成していく必要がある。

(3) ポイント

- (a)通信手段 手紙とメ-ルの良さの違いのように必要な時に適切な手段を利用することが大切である。
- (b)教師間の意志疎通 離れた異なる複数学校間の教師の連絡とお互いの意志疎通を密にする必要がある。